

日本史 A，日本史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

日 本 史 A

1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学、短期大学、専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ。）の段階における基礎的な学習の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており、この目的自体は、従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方、共通テストでは、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。日本史の問題作成方針にも、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

ここでは、本年度の問題について以下の視点から分析し、上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・ 問題内容・範囲は適切であったか。
- ・ 問題の分量・程度は適切であったか。
- ・ 問題の表現・形式は適切であったか。

2 内容・範囲

第 1 問 明治以降の家族の家系図という身近なものから歴史を考察させることを意図した問題。

家系図に記された先祖の生没年等の情報を手がかりに、各時代の諸分野について問う仕組みとなっている。

問 1 戦時下の国民生活の様相についての知識・理解を問う。用語の知識として「国民服」「もんぺ」を問うことは適正であったかやや疑問である。

問 2 標準的な問題。家系図の読み取りから 2 人の先祖が生きた時代について考える。日露戦争の年代（1904～05）と女性参政権実現の年代（1945）の知識を基に思考力を働かせる。

問 3 曾祖母・祖父の婚姻の年（1917・1965）から、戦前民法の性格や日本国憲法の内容についての知識を問う問題。ウの選択肢がそれぞれ異質なものを並べている点に違和感を覚えた。

問 4 生徒が作成した各時代の出生数・死亡数・乳児死亡率・婚姻率についてのメモを基に、戦前～戦後の人口動態統計のグラフについて読み取る技能を問う問題。資料（メモ）とグラフを突き合わせながらそれぞれを丁寧に読み込むことが求められる。

問 5 近代の教育制度についての知識を問う。a・bは単純な知識，c，dは家系図の年号を

読み取った上で知識を活用する思考力・判断力が求められる。cの高等女学校についての内容は細かな知識。

問6 新聞資料の読み取りから戦局が悪化した時期の日本の報道統制などについて問う問題。戦時状況についての知識と、戦時下における新聞が報道した被害の内容について資料から読み取る技能が求められる。

問7 終戦間際の情勢に関する年代並び替え。世界史的な視点も踏まえて戦時情勢の展開を理解できているかを問うているが、Ⅲのイタリアの降伏とⅠの小磯内閣の順番を判断する手掛かりがない点が難解に感じた。

第2問 明治～大正期の女性解放運動家景山（福田）英子の生涯を題材とした問題。政治史、外交史、教育史、社会運動史などに関する小問で構成され、資料を用いた問題もみられた。

問1 空欄補充の組合せを問う。単純に用語のみを問うのではなく、文章を選ばせることで思考力・判断力とともに知識・理解の質を問うことに成功している。

問2 幕末の政治情勢の知識を問う。それぞれ説明文から正しい人名・地名の組み合わせを選ばせるという形式で、単なる用語の暗記ではなく、知識・理解の質を問うている。

問3 景山英子の自伝（資料）からの英子の教育観を読み取る資料読解の技能と、その時代背景となる近代の教育制度についての知識を問う問題。a、bの読み取りの内容とc、dの時代背景との因果関係が不明確に感じた。

問4 戦前における女性解放運動の流れについての知識・理解を問う。明治・大正期それぞれの女性をめぐる時代状況についての知識・理解の質を問う良問。

第3問 海外経験を基に各分野・各時代で活躍した人物をテーマとした問題。人物史を切り口に近現代史の諸分野を横断的に問う小問で構成され、資料を用いた問いもみられた。

問1 幕末政治史及び明治憲法について、文章の前後関係から用語を選ぶ問題。幕末・明治の法制史に関する基本的な知識が身に付いているかが問われる。

問2 金子堅太郎・市川房枝・美濃部達吉・田中義一という近代史上の各時代・各分野で活躍した人物とその事績について問う。基本的な知識が身に付いているかが問われる。

問3 日清戦争～第一次世界大戦における日本の産業や軍備への方針についての知識・理解を問う問題。当該時期における政治・経済についての正確な知識・理解が求められる。

問4 空欄補充の問題ではあるが、単語ではなく資料の引用文を選択肢とすることで資料読み取りの技能と知識・理解の質を問う。パリ講和会議後の国際情勢についての正確な知識・理解を踏まえた上で資料を読み取らせる良問。

問5 原敬と小選挙区制、徳永直と『太陽のない街』という比較的単純な用語の組合せを問う問題。

問6 馬場恒吾が1928年に発表した『議会制度改革論』から、昭和戦前期の選挙や議会の制度についての知識・理解を問う問題。リード文などに記された時代状況を踏まえた上で史料を丁寧に読み込み、学習した知識と結び付けて思考力・判断力を働かせることが求められる。

問7 ファシズムが台頭する時代における世界史の動向のなかに日本史を位置付けるという視点が求められる問題。bの「工部省～」が時期・内容的に異色であることから除外しやすく、dに「独」とあることからYと結び付けやすいため、比較的判断が容易な問題となっている。a、bの選択肢を管理通貨制度と金輸出解禁との対比などにしたほうが、より思考力・判断力を問うことができる問題になったのではないだろうか。

第4問 戦後の農地改革について、調べ学習およびスライドを用いた発表授業という場面を想定した形式の問題。近現代の農業史の知識などを踏まえながらスライドの情報に基づいて思考

力・判断力を働かせることが求められる。

問1 明治期の寄生地主制についての知識・理解を問う問題。寄生地主制の仕組みや時代的背景を踏まえた小作人の生活実態について理解しているかどうかを問う良問。

問2 大正デモクラシー期における社会運動を展開した組織について4つの用語から選択させる標準的な知識問題。知識の整理が求められる。

問3 1920～30年代における寄生地主制と農民運動の展開について問う。歴史事象に対する発展／動揺という評価（解釈）とその根拠をスライドの読み取りから思考・判断させる良問。

問4 戦時体制下における国民生活に対する経済的統制についての知識・理解を問う。Yの「価格等統制令」については、国家総動員法についての正確な知識が求められる。

問5 問2と同様に、歴史上の政策の意図をスライドの読み取りから思考・判断させる良問。スライドの情報を読み取るだけでなく、寄生地主制や戦時体制下の日本の状況についての理解を踏まえないと判断できない仕組みになっている。

問6 農地改革の過程と結果について知識及びスライドの読み取りからの思考力・判断力を問う。①～④の選択肢のうちに純粋な知識を問う選択肢とスライドの読み取りからの判断を問う選択肢が混在している。

問7 戦後日本の農業政策について問う問題。減反政策と農業基本法それぞれの法律や政策目的を時代的な背景と結び付けて思考・判断させる良問。

第5問 近現代の福祉や社会保障制度の歴史について、年表・会話文や諸資料などを基に問う問題。それぞれを丁寧に読み込み、情報を読み取る技能が問われる。

問1 語句の組合せを問う問題。Aの内務省については、会話文をしっかりと読み込むことが求められる。Iの選択肢（日中戦争の勃発）については、1937という年号のみで判断するのではなく、事象の前後関係や因果関係から判断できる選択肢にした方が良かったように感じた。

問2 明治末～大正期の労働問題についての知識・理解を問う。明治末制定の工場法の時代的背景や、大正期段階での労働運動の広がりとの差違について正確な知識・理解が求められる。

問3 「恤救規則」に対する解釈（評価）に基づいて、それに適合する資料を判断させる問題。「貧困者への公的扶助義務を認めたものではない」という解釈に立った上で、丁寧に資料を読み込み、思考・判断させる良問。

問4 大正期段階の生活文化の様相についての基本的な知識・理解を問う問題。

問5 1942年当時の厚生大臣の発言の記録資料から、戦中期の国民健康保険制度の背景に軍国主義的思想があったことを読み取らせる問題。資料と選択肢をそれぞれ丁寧に読み込み思考力・判断力を働かせることが求められる。

問6 学問・思想の自由をめぐる戦前と戦後の状況とそれぞれを象徴するできごとを結びつける問題。比較的単純な知識・理解を問う問題であるが「d 内閣情報局の設置」はやや細かい。

問7 戦後における男女平等社会実現に向けての法律制定の歩みについての知識・理解を問う。Ⅱの教育基本法が最も古いことは比較的判断が容易であったと思われるが、Ⅰの男女共同参画社会基本法（1999年）とⅢの男女雇用機会均等法（1985年）の前後関係の判断は難解。

3 分量・程度

(1) 分量

問題数は大問が5題、小問が32問であったが、知識・理解の質や思考力・判断力・表現力等を問うことに主眼を置いて作問されているため、問題文や資料・図版等を読み解く分量が多い印象が強い。例えば、第1問は7問のうち 1 2 3 5 が系図からの情報の読み取りを前

提とし、**4**がグラフおよび資料（メモ）の読み取り、**6**が新聞資料の読み取り問題であり、受験者は回答に時間を要したことが想像される。60分という試験時間としては適切な分量であったとは思われるが、これ以上読む分量や扱う資料が増えると厳しいのではないだろうか。

(2) 程度

新学習指導要領の趣旨を踏まえ、思考力・判断力・表現力等や資料読み取りの技能等を問う問題が大幅に増えた。しかし、多くは学習事項を踏まえた上で丁寧に問題文を読み解くことで判断することが可能なものであった。また、出題される資料のほとんどが受験者にとって初見となるものだったが、やはり問題の意図を踏まえた上で丁寧に読み解くことで比較的容易に解答することが可能なものが多かった。

知識・理解を問う問題についても、単純な用語の暗記や年表的な知識の習得ではなく、用語の意味する内容や事象の歴史的背景・因果関係を理解できているか、各時代における社会や人びとの生活具体相・実態についてイメージができていないか、といった「知識・理解の質」を問う問題が増えた。ただし、それらの多くは基本的な学習事項について問うており、学習指導要領の内容を逸脱するものではなかった。単純な用語等の知識を問う出題や、やや細かい知識を問う問題も見られたが、思考力・判断力・表現力等や知識・理解の質を問う問題とバランスよく出題されていたように感じた。

世界史と日本史との関わりや、現代との関わりを意識させる問題も随所にみられた。日本史と世界史との関連付けや現代の諸課題への着目という「日本史A」の科目目標に沿った出題であった。

全体を通じて、問題文や資料を正確に読解する能力が求められる問題が多く、そういった能力に苦手意識を持つ受験者は難しく感じた可能性があるが、問題の程度についてはおおむね適切であったと判断される。

4 表現・形式

(1) 設問形式

2つ以上の用語・文章や正誤の組合せを選択させる問題が32問中23問出題されており、組合せの形式が大幅に増えた。これは思考力・判断力・表現力等や、知識・理解の質を問う問題が増えたことで単純な四択問題が減ったことによるものだろう。象徴的な問題が**21**である。歴史的な解釈（評価）とその根拠となる事象を選択させるという出題形式であり、選択式の問題で歴史的な思考力・判断力・表現力等を問うことに成功した良問であった。また、資料の読み取りと知識の組合せを問う問題も目立った。ただし、例えば**6**のように、資料の読み取りから得た情報で判断する選択肢と純粋な知識で判断する選択肢が混在している設問もみられた。全体的に受験者が読む分量が増えていることもあり、その選択肢が、資料の読み取りによって判断するのか、学習してきた知識・理解によって判断するのかを明示するといった、受験者が思考しやすくなる工夫も必要ではないだろうか。

なお、歴史事象の年代並び替え問題が2問（**7** **32**）と少なく感じた。その2問も事象と事象との因果関係で前後を判断することが難しいものであった。

(2) 表現

受験者が難解に感じたと思われる表現等はなかった。ただし、レポート発表・調べ学習となど様々な場面を想定した形式での出題が多かった影響により、リード文が長く感じられる問題が目立った。

5 ま と め（総括的な評価）

諸資料から情報を読み取る技能や、思考力・判断力・表現力等を問う問題が大幅に増えたことで、今後は資料から歴史的事実や情報を読み取る活動や、事象に対する解釈・評価について思考・判断したり表現（言語化）したりする学習活動を授業等で日常的に経験することが重要となってくると考えられる。

一方で、従来のセンター試験が目的としてきた「基礎的な学習の程度」を問うという姿勢そのものが大きく変化したとは言えず、基礎的な知識・理解の習得が前提となる問題内容でもあった。ただし、単純な用語の暗記ではなく、諸事象の歴史的背景や因果関係の理解などに重点をおいた学習がこれまで以上に求められる内容であったように感じた。

要望としては、資料の読み取りを歴史的な知識・理解や思考力・判断力・表現力等とどう結び付けるかという点をさらに追究していただきたい。例えば $\boxed{6}$ は戦時下の新聞報道の内容を資料から読み取らせる問題であるが、ここではもう一步踏み込んで、新聞では被害や戦局の真実が報じられなかったという戦時下における報道統制の実態について思考・判断させたいように感じた。資料の読み取りが単純な文章の読解にとどまらないような作問の更なる工夫を求めたい。

日 本 史 B

1 前 文

大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、大学（専門職大学、短期大学、専門職短期大学を含む。以下同じ。）への入学志望者を対象に、高等学校（中等教育学校及び特別支援学校高等部を含む。以下同じ。）の段階における基礎的な学習の程度を判定し、大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としており、この目的自体は、従前の大学入学センター試験（以下「センター試験」という。）と基本的に同様である。

一方、共通テストでは、平成21年告示高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）において育成することを目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっている。日本史の問題作成方針にも、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討すると示されている。

ここでは、本年度の問題について以下の視点から分析し、上記の共通テストの目的や趣旨が実現されているかどうかについて評価したい。

- ・ 問題内容・範囲は適切であったか。
- ・ 問題の分量・程度は適切であったか。
- ・ 問題の表現・形式は適切であったか。

2 内容・範囲

第1問 博物館を訪れた高校生2人の貨幣に関する会話から、飛鳥時代から昭和時代にわたる出題がなされた。政治史、社会史に関する小問を中心に構成され、図版やグラフ、インターネット上の資料を用いた多様な問いがみられた。

問1 歴史的評価を示す2つの文に対し、根拠となる法令の内容をそれぞれ選択する問題。法令は飛鳥・奈良時代のもの。基礎的な用語の理解とともに論理的な判断力が求められた。

問2 鎌倉時代の図版について、描かれた事象の背景と読み取った内容を選択する問題。図版の読み取りは、問題文Aに示される高校生のメモや会話の内容と関連付けて正答を判断する総合的な考察力が求められた。

問3 室町時代の経済に関する2文の正誤を判断する問題。室町時代の権力構造や需要が増大する社会の様子について正確な理解が求められる問題であった。

問4 江戸時代の小判に関するグラフを読み取り誤文を判断する問題。グラフに示されるデータの項目を正確に理解した上で数値の変化を把握する技能と分析力が求められた。

問5 明治時代の貨幣制度に関する3文の整序問題。貨幣制度の変遷を明治時代の政治史の流れと関連付けて考察できるかが問われる問題であった。

問6 インターネット上の資料と解説文を踏まえ、日本の貨幣に関する正文の組合せを判断する問題。資料とその解説文、また問題文Bの会話に示される情報を手掛かりに正文を選択する。用語の理解とともに、問題文・資料・選択肢の全てを丁寧に読み解く読解力や複数のソースから得た情報を統合させる考察力が問われる問題であった。

第2問 文字使用の歴史というテーマ学習における高校生の発表から、弥生時代から平安時代に

わたる出題がなされた。政治史, 外交史, 文化史に関する小問を中心に構成され, 文字史料を用いた問いもみられた。

問 1 1 世紀, 3 世紀, 5 世紀における中国王朝の領域が示された地図の整序問題。『魏志』『後漢書』『宋書』といった文献史料に関する正確な理解が求められる問題であった。

問 2 古墳時代の銘文について行われた分析と歴史的評価の 2 文の正誤を判断する問題。銘文を読み取る読解力と 2 つの鉄刀・鉄剣銘に対する歴史的評価の正確な理解が求められた。

問 3 木簡資料から示される 2 つの事例から, 7 世紀の日本の漢字文化の様子とその背景を選択する問題。事例から論理的に判断する力とともに, 「吉備真備」「白村江の戦い」といった用語に関する正確な理解が求められた。

問 4 国風文化についての 2 つの評価に対する根拠を選択する問題。知識よりも根拠と歴史的評価の因果関係を正確に考察できるかが問われる問題であった。

問 5 古代についての 4 文の正誤を判断する問題。第 2 問に示された問題文・資料・選択肢の全てを丁寧に読み解く読解力や得た情報を統合させる考察力, 考察した結論を評価としてまとめる表現力が問われる問題であった。

第 3 問 中世の都市と地方の関係についての文章から, 平安時代から江戸時代にわたる出題がなされた。政治史, 社会史, 文化史に関する小問を中心に構成され, 文献史料, 絵図を用いた問いもみられた。

問 1 (1) 紀伊国那賀郡神野真国荘に関する史料を読み取り 2 文の正誤を判断する問題。「郡司」「国衙」「院庁下文」といった荘園に関する基本的な用語の理解が求められた。

問 1 (2) 絵図を読み解く方法から, その方法で分かることを選択する問題。意味や目的を把握しながら適切な読み取りの方法を選択するという対資料の技能が問われる問題であった。

問 2 平安時代末期から鎌倉時代についての 4 文の正誤を判断する問題。選択肢の記述は政治史, 文化史にわたる。「六勝寺」「奉公」など用語に関する正確な理解が求められた。

問 3 室町時代の一揆に関する 3 文の整序問題。室町時代における権力構造の変化, 社会の変化とそれぞれの一揆の特性を関連付けて考察できるかが問われる問題であった。

問 4 鎌倉時代から室町時代の文化に関する 2 文が示す語句をそれぞれ選択する問題。「宗祇」と「連歌」など用語と用語の関連性を含めた用語に関する正確な理解が求められた。

第 4 問 近世社会の儀式や儀礼に関連して, 江戸時代についての出題がなされた。政治史, 外交史, 社会史に関する小問を中心に構成され, 説明文付きの絵図, 文献史料を用いた問いもみられた。

問 1 江戸城本丸御殿の模式図と殿席の説明の読み取りに関する 2 文の正誤を判断する問題。近世政治史の基本的な理解とともに, 図と説明を正確に読解する力が求められた。

問 2 武家諸法度に関する 3 文の整序問題。それぞれの時期における日本の状況と関連付けて武家諸法度の内容を考察できるかが問われる問題であった。

問 3 江戸時代の対外関係に関する 4 文の正誤を判断する問題。「通信使」「オランダ風説書」「謝恩使」「松前奉行」といった用語の内容に関する正確な理解が求められた。

問 4 (1) 江戸時代の町法に関する史料から内容を読み取り, 誤文を判断する問題。受験者にとっては初見と思われる史料である。史料を丁寧に読み解く読解力が求められた。

問 4 (2) 江戸時代の布告に関する史料から読み取れる内容とその資料の評価について, 正文の組合せを判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力と論理的な思考力が求められた。

第 5 問 景山英子についての文章から, 幕末から大正時代にわたる出題がなされた。政治史, 外交史, 社会・教育史に関する小問を中心に構成され, 史料を用いた問いもみられた。

問 1 文中の空欄に適する語句の組合せを選択する問題。「大阪事件」「社会主義」といった本

文中のキーワードから正解を導く問題であり、用語の内容の正確な理解が求められた。

問2 幕末の武士に関する2文が示す人物をそれぞれ選択する問題。「薩摩藩」と「西郷隆盛」など場所と人物の関連性に正確な理解が求められた。

問3 景山英子が記した史料から読み取れる内容と史料の時代背景について、正文の組合せを判断する問題。史料を丁寧に読み解く読解力とともに、「教育勅語の発布」「義務教育期間の延長」といった出来事に関する正確な理解が求められた。

問4 景山英子が文章を記した時期の社会に関する2文の正誤を判断する問題。女性史を正面から取り上げる問題である。「新婦人協会」の活動時期と運動の結果という用語の包括的な理解が求められた。

第6問 農地改革をテーマにした発表に向けて高校生が作成しているスライドから明治時代から昭和時代にわたる出題がなされた。政治史、社会史に関する小問を中心に構成され、グラフを用いた問いもみられた。

問1 明治時代の地主と小作人に関する2文の正誤を判断する問題。明治時代初期の農民層の分解に関わる正確な理解が求められた。

問2 1920年代に活動した組織を選択する問題。1920年代が社会運動の高まりのあった時代であるという理解と、歴史の中で形成された組織の理解を組み合わせることが求められた。

問3 文中の空欄に入る語句と、その語句が入る理由の組合せを選択する問題。スライドから読み取れる農業をめぐる状況を語句として表現する力が求められた。

問4 戦時下の物資の統制に関する2文の正誤を判断する問題。制度の内容や法と制度の相関関係といった制度についての正確な理解が求められた。

問5 文中の空欄に入る語句と、政策の目的の組合せを選択する問題。スライドから読み取った情報を分析する力、分析をもとに行われた政策の目的を仮定する力が求められた。

問6 スライドに示された文とグラフから誤文を判断する問題。示された文章の背景を考察する力、グラフを正確に読み取る力が問われる問題であった。

問7 戦後に行われた2つの農業政策に対し、その目的をそれぞれ選択する問題。戦後の農業政策を農業をめぐる状況の変化と関連付けて考察できるかが問われる問題であった。

【総合所見】

内容については、学習指導要領の目標に則しての出題であった。

史資料に基づく考察力を問う姿勢が強く示され、9種13点の資史料が提示された。6では、現代の情報社会にふさわしく、インターネット上の資料が提示された。分析の技能については、多様な資史料が扱われる中でも問われたが、13では資料読解の技能が直接問われ、資史料の分析技能を重要視する姿勢が強く示された。また、地理的要素についても、7や23で問われ、同じく重要視する姿勢が示された。

知識の理解については、背景や目的、他の歴史的事象との関連付けなど理解の程度を問う出題がなされた。18は歴代の武家諸法度の整序問題であったが、時代背景を的確に理解していることで解答できる良問であった。

範囲について、時代別では、第1問で奈良時代から昭和時代までが扱われ、第2問は弥生時代から平安時代までの古代史、第3問は平安時代末期を含む中世史、第4問は近世史、第5問・第6問は戦後を含めた近現代がそれぞれ扱われた。縄文時代以前の問いはないものの、戦後を直接扱った問いが2題あるなど、古代から現代までバランス良く出題された。分野別では、政治史、社会・経済史を中心に構成されていた。外交史・文化史は、直接問われる問題はやや少なかったが、複数分野にまたがった多面的な考察力を問う問題の中で扱われた。

3 分量・程度

60分の試験時間に対して、問題数は大問が6題、小問が32題であった。リード文が小問に大きく関わるようになったことや史資料の読解問題が増加したことによって受験者の負担はやや大きくなったのではないかと思われたが、昨年度に比べて小問数は減少したことや平均点が64.26であったことを考えると分量は適切であったといえる。

問題は、基本的な知識の正確な理解や基礎的な力を問う問題が主体であり、程度は適切であった。例えば、**26**では、明治期の農業をめぐる大きな状況を個々の要素に分解して問うことで、受験者の理解の正確性を測っていた。しかし、一方で、**15**にみられた山城の国一揆と加賀の一向一揆の前後関係や、**24**にみられた教育勅語と義務教育期間延長の前後関係など、受験者にとって選択肢の間の因果関係がつかみにくく、やや細やかと思われる内容が問われた設問もみられた。史資料については、受験者にとって初見と思われるものが複数あったが、難解なものはなく、また、脚注が丁寧に付され、読むことで正確な判断ができるよう配慮されており、複雑な問いもなかった。このような配慮については、今後も継続していただくことを強く希望したい。

4 表現・形式

全体を通して受験者にとって難解な表現はみられなかった。選択肢の文も簡潔に記述され、受験者が正確な判断ができるように配慮されていた。また、史資料の提示を含めたリード文・問題文は、レイアウトが工夫され、明確であった。

形式については、歴史的評価から根拠を選択する形式(**1**・**10**)、事例から歴史的評価を選択する形式(**9**)、語句から理由を選択する形式(**28**)、政策から目的を選択する形式(**30**)など、多様な出題形式がとられた。なお、整序を求める問題は今年度も出題され、4題であった。また、問題作成方針に示された力を問うため、問題には様々な工夫がみられた。知識の理解に基づいた考察力を問う良問としては**1**や**10**があった。多面的な考察力は、史資料どから読み取った内容と既存の理解を組み合わせる問題でも求められた。中でも**2**や**6**では、複数のソースを読み解く読解力や得た情報を統合させる考察力を問う良問であった。**11**や**28**では、表現力を問うための適切な工夫が設問に凝らされていた。

5 まとめ(総括的な評価)

今年度より新たに始まった大学入学共通テストは、全体的に基本的な知識の正確な理解や基礎的な力を問うものであり、受験者の培ってきた力や理解を評価するのにふさわしい問題であった。また、今度のテストは、高等学校における日本史学習に、基本的な知識理解とともに、歴史的事象の意味や意義、特徴、つながりの総合的な考察を明確に求めるものであった。読み取った情報を分析し、根拠をもって当てはまる語句を仮定することを求めた**30**は特に象徴的である。第1問や第2問、第6問は、博物館や学校の授業といった実際の学びの場がシチュエーションとして設定されているが、ここに示されるような学びの過程を実践することがこれからの高等学校の授業に求められる。

まとめとして、まず、過渡期にあたる今年度の受験者が必要以上に混乱しないよう配慮をいただいたこと、そして、新学習指導要領の全面実施が二年後にせまる中、出題形式に様々な工夫をこらしたり、リード文を含めた設問全体で一つの学習過程を示したりするなど、高等学校における日本史学習に指針を示す工夫をしていただいていたことに感謝したい。

その上で、高等学校における探究的な活動の浸透のため、問われる知識の更なる精選と、リード文に示される学習過程の更なるリアリティーの追求をお願いしたい。

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 川瀬 徹 会員数 約16,200人)

T E L 042-392-1235

今年度の大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では共通テスト(1)「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点など全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 はじめに

平均点は、今年度は「日本史A」が49.57点、「日本史B」が64.26点であった。前年度に比べて平均点は「日本史A」が4.98点上がり、「日本史B」が1.19点下がった。これにより、「日本史A」と「日本史B」との差は20.86点から14.69点に縮小された。「日本史B」との共通問題である第2問と第4問は「日本史A」を高等学校で学習してきた受験者にとって、今回は比較的解答しやすい内容であったと思われる。例年要望していることであるが、「日本史A」と「日本史B」との平均点の差ができるだけ縮小されるような配慮をお願いしたい。

以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

日本史A

「日本史A」について、設問数は大問5題、小問32題の構成であった。例年通りの32問構成であった。出題範囲は幕末から戦後までであり、「日本史A」の学習範囲内で適切な設定であった。ただ、幕末に関連する問題が1問と少なく、その問題も明治期との時代横断の問題で幕末期だけによる出題は見られなかった。今年度の特徴は多様な資料を用いての考察を促している点である。家系図、複数資料による資料読み取り、新聞資料、発表用スライドなどである。また、新課程の「歴史総合」を見据えて世界の動きとの関係性を問う問題も見受けられた。しかし、地図を用いた出題は見られず、空間認識を問う観点からは物足りなさがあった。

出題形式別では、語句の組合せが7題、正文組合せ、人物・事項の組み合わせ問題が各6題、正誤組合せ問題が5題、正文選択が3題、誤文選択・年代配列が各2題、語句の選択が1題となった。昨年と比べても何らかの組合せによって正答を選ばせる問題が増えている。一方、年代配列などの定番と言える問題形式が2題と減少した。年代配列は工夫をすれば因果関係や年代ごとの理解によって受験者に正答を選ばせることもでき、年代を暗記していなければ解けないような出題でなければ、歴史的な思考力を問うには適切な形式であると言える。

時代別では、過渡期を問う時代横断型の出題が12題と最も多く、時代ごとの知識・理解を基に、各時代を比較する複合的な視野が求められた。各時代を問う出題は、幕末1題、明治6題、大正2題、昭和（戦前・戦中期）8題、昭和戦後期以降3題であった。昭和戦後期以降に関する単独の出題は少なかったが、時代横断の出題に含まれることが多かった。このことは、戦前と戦後のつながりや関係性を問うという視点では、新課程の「わたしたち」とつながる歴史認識を意識している部

分とも解釈できるが、戦前と戦後の年数がほぼ等しくなっていることを踏まえると、やはり戦前期に偏していると言えるだろう。

分野別では、多分野にまたがる混合問題が14題であり、分野の知識・理解の上に、各分野を統合する俯瞰的な視野が求められた。各分野を問う問題では混合問題も含めると、政治が17題、社会経済16題、軍事外交が9題、文化が10題であった。今年度は「諸資料を用いた近現代の総合問題」や「農地改革の背景と結果」に代表される、政治・経済両分野からの出題が多かった半面、軍事外交分野からの出題が少なかった。とはいえ、全体的に特定の分野に偏らない出題となった点は評価できる。以下、詳細を見ていくものとする。

第1問は資料を用いた会話文による近現代の総合問題であった。中間Aは家系図を用いた問題である。問1は会話文中の空所補充問題である。それぞれの空所の前後の文脈から正答を導くことができる。空所アは直後の説明から、空所イはその前の説明から時期判断を行って判別することができる。知識ではなく会話文という問題の資料から正答を導くという点では良問であるが「パーマメント(大正期)」「もんぺ(戦時期)」は用語の頻度としてはかなり低く、大正期と昭和前期ということで年代の判別もしにくかった。「国民服(戦時中)」「ざんぎり頭(文明開化期)」は「国民服」の頻度が高いとは言えないものの消去法で答えられたであろう。問2はXYの正誤判定問題であった。家系図の人物の生きた時代と照らし合わせて考察させる問題という点では良問ともいえるが、一方で結局は年代の知識が求められている感も否めない。Xは日露戦争、Yは女性参政権の年代が把握できないと家系図の中で考察することができない。家系図は生きた時代の表記だけではなく、エピソードを別のカードなどで載せることによって社会状況を読み取らせて考えさせる、というような工夫が必要であろう。問3は説明文中の語句補充の問題である。空所ウの選択肢の「ボアソナードが起草した民法」は対となる選択肢が「戸主の強い権限を定めた民法」という内容説明になっているので、「ボアソナード」といった人名ではない方が適切な選択肢であろう。あるいは「穂積八束らによる」のように後者の選択肢も人名で説明するように工夫することが望ましい。また、空所エについては正答が「両性」になるが、結婚が法的に「両性の合意による」という現行憲法24条の条文を知っている必要があるだろうか。資料として戦前の結婚の規定と戦後の結婚の規定が対比されたうえで、資料を読み取るのであれば良問になると思うが、結婚における「法的には」の解釈が日本史Aの試験で問われることが適切かどうかは疑問がある。また、この問題も問2と同様に家系図や説明文を用いて考察させているが、婚姻時期と民法・憲法の制定時期との年代の比較によって判別する出題にとどまっている。問4はメモをもとにしたグラフの読み取りで複数の資料を活用し判断する、共通テストらしい良問である。折れ線グラフcが極端な推移を見せるため判別自体は難しくなく、メモを丁寧に読めば必ず正答を選べる。問5は近現代の教育制度についての問題としてリード文では示しているがa・bの二者択一は知識を問う問題で、bの「検定教科書」については用語の頻度も低く難問である。c・dの二者択一は家系図の年代から選択する問題であり、dの学校教育法が戦後の法令であることが判別できれば答えられる。ただし、cの「高等女学校」については「高等女学校令」の頻度は低く、消去法で選択肢を絞ることは難しい。中間Bは戦時期の手紙・新聞資料による問題であった。問6は新聞資料の読み取り問題で見出しとなっている「三度来襲、今なお激戦中」とその後の説明からここまでの二回は撃退したことを読み取らせる問題。資料活用問題としては共通テストらしい問題である。選択肢①の「B29」がアメリカの爆撃機であることは用語の頻度としては高いが、テストで問う必要がある知識であるか疑問は残る。表記も「中国の爆撃機の種類」ではなく「中国軍(製)の爆撃機」の方が適切であろう。問7は年代配列であったが、3つの選択肢がそれぞれ1年刻みになっていて難問である。受験者はⅡの「原子爆弾」からこれを終戦の年と判断はできるであろうが、Ⅰの「小磯首相」とⅢの「イタリアの降伏」は判別するのは

難しかったのではないだろうか。小磯首相を東条首相，イタリアの降伏をドイツの降伏にした方が受験者としては馴染みがあり，解きやすかったと考えられる。『新版 きけ わだつみのこえ』の日記資料を活用しているが単なる選択肢になってしまっており，資料の活用には工夫の余地があろう。年代配列に関しては年代暗記が正攻法とならないような，文脈で因果関係が見えて前後関係が説明できる，もしくは時代背景や社会情勢の相違から判断が可能な選択肢の配慮をお願いする。

第2問は景山（福田）英子の生涯に関する問題である。問1は朝鮮の内政改革と平民社を問う，発展的な語句の組み合わせ問題である。①②「イ平民社」（社会主義系）と③④「イ政教社」（国家主義系）の区別で，判断を迷った受験者は少なくなかったであろう。問2は西郷隆盛と箱館を問う，基本的な人物・事項の組み合わせ問題である。問3は史料の内容と背景を問う，標準的な正文の組み合わせ問題である。史料として、『妾の半生涯』が出題された。（注）を丁寧に辿ることで，内容は容易に把握できる。問4は1900年代の社会における女性の立場を問う，発展的な正誤の組み合わせ問題である。文Yの「女性が政治集会に参加することは禁止されていた」に関しては，治安警察法の内容であるため，かなり深い知識が受験者に求められた。

第3問は近代の外交と国内政治についての問題である。中間Aは明治期の問題である。問1の空欄補充は空所Aの選択肢が「王政復古の大号令」と「五箇条の誓文」で年代が近く難しい。直前の主語が「明治政府」となっていることから「五箇条の誓文」に絞れるが，空所以後にある「智識を世界に求める」という書き抜きだけで判別するのは難しい。空所イは憲法の模範としたことからドイツを選択しやすかったであろう。問2は外交経験を有する人物についての誤文選択問題であったが単なる知識問題になっている。海外の留学経験がどのように内政や文化に影響を与えたのかを問うような問題で構成した方が有益であろう。この出題形式だと，この四人に海外留学経験があるという説明が解答するうえでほとんど意味をもたない。人物と海外経験の影響を受けた功績の組み合わせや，ある事象の関連する人物とその海外経験の組み合わせなど，情報を組み合わせて考察し判断させるような出題の工夫ができたのではないか。問3の正誤問題は日清戦争から日露戦争の時期区分をした問題でXの内容は1930年代の満州事変以降の内容なので，年代が異なるために誤文だと判別できる。一方Yは日露戦争後の軍縮の正誤を問う問題になっている。日露戦争後の経済的な逼迫を問うという意味では適切な問題であったが，Xに合わせて年代をずらすような内容か，「日露戦争」という名前は出さずに「賠償金を得られなかったため」のように内容説明を入れて受験者に考えさせるのも一つの方法であろう。しかし年代のような些末な知識ではなく時期や時代背景で判別できる良問である。中間Bは大正期の問題である。問4は戦前の各時代の外交方針が選択肢となっており，読み取るべきキーワードはあるが，選択肢の文章全体から時代背景を読み取ることもできる良問である。時期設定を国際連盟の創設後に限定したためか選択肢の年代が近いのがやや気になるが，今後の歴史総合などを踏まえ，国際情勢の中における日本の立場や関係性の学習の必要性がメッセージとして示されている。問5は人物と功績の組み合わせ問題であり，原敬と小選挙区制，徳永直と太陽のない街は選択しやすかったと考えられる。しかし，語句aの「比例代表制」は「小選挙区」の対として置かれているとはいえ，歴史用語とは言い難い。小選挙区を問うのであれば，その目的やその結果に焦点を当てる方が適切であろう。中間Cは昭和期の問題である。問6は語句組合せである。リード文の「衆議院に無産政党的議員が誕生した年」というところから最初の普通選挙を想起することと，史料内の「衆議院」との対応に気づければ正答を選びやすい。問7は事項の組み合わせ問題である。世界の動きと日本の動きを組合させる新課程を見通した問題形式である。特にブロック経済圏の成立と日本の円安による輸出の増加は因果関係でつなぐことができ，ヒトラー政権と日本政府の関りの変遷を踏まえれば防共協定を選ぶことができる。歴史的思考力を問う意味でも良問であったが，受験者にとっては難問になったと考えられる。この問題は，国際情勢との関係性について歴

史を学ぶ視点を持てるような学習を進めるうえでよい教材になるであろう。

第4問は農地改革の背景と結果に関する問題である。中間Aは農地改革の歴史的背景について、明治から昭和戦前期にかけての時期を取り扱っている。問1は明治期の大地主と小作人の関係を問う、発展的な正誤の組合せ問題である。多くの受験者が苦手とする、土地制度と社会運動にまたがる苦手分野からの出題であった。問2は1920年代に活動した組織を問う、基本的な語句の選択問題である。単語の選択は近年見られなかった出題形式である。問3はスライドにあてはまる語句と理由を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。従来の大学入試センター試験では見られなかった出題形式であり新鮮な印象を受けた。スライドの内容に解答の手掛かりがあるため、日本史の知識は特に必要としなかったと思われる。中間Bは農地改革の歴史的背景について、昭和の戦時期を取り扱っている。問4は戦時下の物資統制を問う、標準的な正誤の組合せ問題である。問5はスライドにあてはまる政策と目的を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。問3同様の出題形式であり、次年度以降は難易度を上げた出題を期待したい。中間Cは農地改革の過程と実績について取り扱っている。問6はグラフの内容を問う、基本的な正誤問題（誤文選択）である。「経営規模別農家戸数と兼業農家戸数の割合」の棒グラフが出題された。問7は農業政策の展開を問う、標準的な正文の組合せ問題である。

第5問は年表と会話文を用いた近現代の社会福祉・社会保障に関する問題であった。明治期から戦後まで横断する年表を用いることで時代を通観する問いについても意識づけがされている。問1は語句による空所補充である。空所アの正答である内務省は、受験者にとっては初期の殖産興業とのちの治安維持・警察機構としての学習がほとんどであり、社会福祉や社会保障の関連省庁としては学習していない。そのため、この問題では設置年の1873年から内務省を選ばざるを得ない。対となる農商務省と比較すれば消去法として内務省を選ぶことは難しくないが、年代暗記を助長しかねない出題であった。問2は労働者に関する正誤問題で日本労働総同盟が1920年代の大正期を代表する社会運動であることがわかれば選択できる。問3は年表中の用語の解説をもとに選ぶ問題だが、正答を導くうえで下線部の説明を解釈する問題になっている。問題文に列挙された四つのうち、受験者が条文を読んだことがあるのは日本国憲法だけであり、消去法で選択肢を絞りにくいことを踏まえると、下線部bでの説明から受験者に読みとらせるのではなく、元の資料の読み取りを受験者にさせる方が適切であろう。問4は正文組合せ問題で、マス・メディアと出版物の組合せとなっており、時代も大きくずらされている。そのため、文化史の問題ではあるが受験者にとっては取り組みやすかったであろう。問5は国民健康保険に関する資料の読み取り問題で、(注)を丁寧に確認すれば正答を選べる。この大問の肝となる資料であるので、具体的にこの考え方にしたがってどのような政策が実施されたのかを考えさせる形式でも良かった。単なる資料読み取りの国語のような問題に終始せず、読み取った内容から思考し判断する問題形式が望ましい。問6は事項の組合せ問題である。bの三・一五事件が普通選挙実施直後の共産党員検挙事件であることを踏まえれば、年表のBの時期からは外れるので誤りだと気づけるが、Xで説明される「思想に対する統制」という意味では合致するので紛らわしい問題となった。Yは日本学術会議を説明から読みとることができるが、誤選択肢の内閣情報局は頻度も高くはないので適切ではないように感じた。戦前の事項から出題するのであれば、例えば「特別高等警察の設置」などが適切であろう。問7は男女平等に関する年代配列問題である。問題文より「敗戦から現在にかけて」とあるのでⅡが最も年代の古いきごとであることは判断できるが、ⅠとⅢの判別が難しい。Ⅰの男女共同参画社会基本法にしてもⅢの女子差別撤廃条約にしても、政治経済や現代社会の学習で触れることはあっても、「日本史A」の学習では頻度が高いとは言えない（いずれも、7種類ある「日本史A」の教科書のうち、記載があるのは3種類である）。国際的な条約締結と国内法整備の関連性で言えば前後関係は理解できるが、そ

れを年代配列で問うのは難しかったであろう。

日本史B

「日本史B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成であった。昨年に比べ問題数は4題の減少であった。出題範囲は古代（弥生）～現代（昭和戦後）までであり、「日本史B」の学習範囲内で適切な設定であった。今年度の特徴として、作問の随所において、学力の三要素である主体的に学習に取り組む態度を意識した内容が盛り込まれており、大問のリード文においても、従来の文章題が減少し、生徒のプレゼンテーションを踏まえた出題が増加した。その他、新科目『歴史総合』を意識した第2問・問1、空間認識を意識した第3問・問1(2)及び第4問・問1、読み取った情報を手掛かりに表題を導く第6問・問3及び問5のように、知識偏重に陥らないように工夫された良問が見られた。

出題形式別では、人物・事項の組み合わせ問題、正誤の組み合わせ問題が各7題、正文の組合せ問題が6題、正誤問題（誤文選択）が5題、年代配列問題が4題、正誤問題（正文選択）、語句の組合せ問題、語句の選択問題が各1題であった。大学入試センター試験では各大問に設定されることの多かった語句の組合せ問題が1題に減少し、語句を問う出題自体が32題中2題となったことは、大学入学共通テストの本質を象徴する出題となったと考えられる。

時代別では、過渡期を問う時代横断型の出題が12題と最も多く、時代ごとの知識・理解をもとに、各時代を比較する複合的な視野が求められた。各時代を問う問題では、古代の出題では古墳・飛鳥・奈良・平安各1題、中世の出題では院政2題、鎌倉・室町各1題、近世の出題では江戸2題、近現代の出題では明治6題、昭和（戦前・戦中期）・昭和戦後以降各2題であった。例年と同様、各時代の特徴を端的に理解し、整理する力が求められた。今年度は時代横断も含め、旧石器・縄文・織豊・南北朝からの出題がなかった。次年度以降も引き続き、出題する時代の均衡が保たれるような配慮をお願いする。

分野別では、複数の分野にまたがる混合問題が17題と最も多かった。分野ごとの知識・理解の上に、各分野を統合する俯瞰的な視野が求められた。各分野を問う問題では、混合問題も含めると、政治が17題、社会経済17題、軍事外交が7題、文化が11題であった。今年度は「貨幣の歴史」や「農地改革の背景と結果」に代表される、政治・経済両分野からの出題が多かった半面、軍事外交分野からの出題が少なかった。とはいえ、全体的に特定の分野に偏らない出題となった点は評価できる。以下、詳細を見ていく。

第1問は日本の「貨幣の歴史」に関するテーマ問題である。高校生の会話を通して、古代から近現代までを俯瞰する内容となっている。中間Aは古代から中世の貨幣史について取り扱っている。問1は国家の貨幣政策と8世紀前半の法令を問う、標準的な人物・事項の組み合わせ問題である。教科書記載の知識がなくても、資料の情報を基に解答を判断できる工夫がされた良問である。問2は図版の内容を問う、標準的な正文の組み合わせ問題である。資料として、『一遍上人絵伝』が出題された。文Cは「頑丈な瓦葺きの建築である」と、図から読み取る内容ではあるが、他の選択肢の内容と全く異なっている。貨幣に関わる内容で統一されることが望ましかった。問3は撰銭令と寧波の乱を問う、基本的な正誤の組み合わせ問題である。中間Bは近世から現代の貨幣史について取り扱っている。問4は帯グラフの内容を問う、基本的な正誤問題（誤文選択）である。グラフとして、「慶長期～万延期の小判の重量と金の成分比率」が出題された。問5は明治期の金融制度を問う、標準的な年代配列問題である。受験者にとっては苦手な意識をもつ分野であるが、「①銀本位制」「②金本位制」の成立過程を押さえた良問である。問6は日本の貨幣制度及び貨幣に関する新聞記事の背景を問う、正文の組合せ問題で、難易度は標準的である。資料として、『ジアリオ・ダ・ノイテ紙

(サンパウロ版)1947年5月3日版』が出題された。アーカイブを意識した点は評価できるものの、前近代の貨幣制度を説明した文a・bと資料や解説文との関連性が薄く、唐突な印象をうける。本問はテーマ史の総括という位置づけの設問であり、資料の読み取りは別の設問として独立させたほうが良かったであろう。

第2問は古代の文字使用に関する問題である。中間Aは高校生Aの発表を通じて、文字使用の開始について取り扱っている。問1は1・3・5世紀の中国諸王朝の領域を問う、発展的な年代配列問題である。受験者や教職員にとって、中国諸王朝の領域についての出題は想定外であったと思われるが、新科目「歴史総合」を先取りする出題として評価できる。問2は史料の内容を問う、基本的な正誤の組合せ問題である。史料として、『江田船山古墳出土鉄刀銘』が出題された。(注)を丁寧に辿ることで、内容は容易に把握できる。中間Bは高校生Bの発表を通じて、文字使用の展開について取り扱っている。問3は日本と東アジア諸国の関係における漢字文化を問う、標準的な正文の組合せ問題である。問4は国風文化に見る中国の影響を問う、標準的な人物・事項の組合せ問題である。教科書の知識がなくても、資料の情報を基に解答を判断できる工夫がされた良問である。問5は古代における文字使用を問う、標準的な正誤問題(誤文選択)である。

第3問は中世の都市と地方に関する問題である。問1(1)は史料の内容を問う、基本的な正誤の組合せ問題である。史料として、『紀伊国留守所施行符』が出題された。(注)を丁寧に辿ることで、内容は容易に把握できる。(2)は地図の内容を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。地図として、「紀伊国那賀郡神野真国荘絵図」が出題された。視覚的な情報を活用して解答を導くという、従来にない出題であった。今後もこのような出題を期待したい。問2は院政期から鎌倉期の都市と地方の関係を問う、標準的な正誤問題(誤文選択)である。問3は室町期の一揆を問う、標準的な年代配列問題である。問4は鎌倉期から室町期の都市と地方を問う、基本的な人物・事項の組み合わせ問題である。

第4問は近世社会の儀式・儀礼に関する問題である。問1は殿席の内容を問う、発展的な正誤組合せ問題である。模式図として、「江戸城本丸御殿」が出題された。受験者にとっては馴染みのない資料であったため、戸惑った者も多かったと推察される。第3問・問1(2)と同様に空間認識を問う良問であった。問2は武家諸法度の変遷を問う、発展的な年代配列問題である。文I「大船の建造禁止を解き、」に関して、安政の改革の一環であることを想定できた受験者は多くなかったと思われる。問3は幕府の対外関係を問う、基本的な正誤問題(正文選択)である。問4(1)は史料の内容を問う、標準的な正誤問題(誤文選択)である。史料として、「須坂町法取締規定書」が出題された。

(注)を丁寧に辿ることで、内容は容易に把握できる。問4(2)は史料の内容を問う、基本的な正文の組合せ問題である。史料として、『幕末御触書集成』第1巻から初期の天長節に関する布告が出題された。(注)を丁寧に辿ることで、内容は容易に把握できる。問4のリード文からは、近世(江戸時代)の休日と近代(明治時代)の祝祭日の比較を意図していたと推察される。しかし、それぞれの史料を個別に読み取る出題となっていた。次年度以降、史料を比較・検討させた上で、解答を判断させる出題を期待したい。

第5問は景山(福田)英子の生涯に関する問題である。問1は朝鮮の内政改革と平民社を問う、発展的な語句の組合せ問題である。①②の「イ平民社」(社会主義系)と③④の「イ政教社」(国家主義系)の区別で、判断を迷った受験者は少なくなかったであろう。問2は西郷隆盛と箱館を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。問3は史料の内容と背景を問う、標準的な正文の組合せ問題である。史料として、『妾の半生涯』が出題された。(注)を丁寧に辿ることで、内容は容易に把握できる。問4は1900年代の社会における女性の立場を問う、発展的な正誤の組合せ問題である。文Yの「女性が政治集会に参加することは禁止されていた」に関しては、治安警察法の内容であるた

め、かなり深い知識が受験者に求められた。

第6問は農地改革の背景と結果に関する問題である。中間Aは農地改革の歴史的背景について、明治から昭和戦前期にかけての時期を取り扱っている。問1は明治期の大地主と小作人の関係を問う、発展的な正誤の組合せ問題である。多くの受験者が苦手とする、土地制度と社会運動にまたがる苦手分野からの出題であった。問2は1920年代に活動した組織を問う、基本的な語句の選択問題である。単語の選択は近年見られなかった出題形式である。問3はスライドにあてはまる語句と理由を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。従来の大学入試センター試験では見られなかった出題形式であり新鮮な印象を受けた。スライドの内容に解答の手掛かりがあるため、日本史の知識は特に必要としなかったと思われる。中間Bは農地改革の歴史的背景について、昭和の戦時期を取り扱っている。問4は戦時下の物資統制を問う、標準的な正誤の組合せ問題である。問5はスライドにあてはまる政策と目的を問う、基本的な人物・事項の組合せ問題である。問3同様の出題形式であり、次年度以降は難易度を上げた出題を期待したい。中間Cは農地改革の過程と実績について取り扱っている。問6はグラフの内容を問う、基本的な正誤問題（誤文選択）である。「経営規模別農家戸数と兼業農家戸数の割合」の棒グラフが出題された。問7は農業政策の展開を問う、標準的な正文の組合せ問題である。

3 ま と め

今年度は、大学入学共通テスト元年ということもあり、出題の形式や内容をめぐり、教育現場も期待と不安とが交錯する一年であった。

そのような中、「日本史A」は全体を通して、家系図や新聞資料やレポートなど多種多様な資料を活用して思考・判断させることを意図した構成になっていたといえる。ただし、資料を活用しながらも正答を導く際に年号暗記に拠ることが多く、また「日本史A」の学習範囲としては逸脱するような知識を求める問題も散見された。問題形式の構成は目新しいものに走り過ぎず、定番の問題も含めながら学習到達度をはかるのに適切な難易度であったが、問題の形式は受験者や指導にあたる教職員の指導の道しるべとなるものであることを考えると、些末な知識を必要とするつくりは極力避けるよう配慮いただきたい。また、例年に比べて組合せを問う問題が多かった。必要に応じて組合せになる問題なら意図があるが、二者択一問題を二つ解くような出題もあった。解きやすくなるが、二者択一で選ばせる内容は極力避け、複数の視点で考察できるような構成をお願いする。

次に「日本史B」は全体を通して、各分野の特徴を網羅した内容であり、文章の読解力を重視した出題を維持しつつも、図版・グラフ・史料といった豊富な資料を活用し、思考・判断につなげる出題が多く見られた。受験者及び指導にあたった教職員にとって、不易と流行の均衡のとれた出題であったように思われる。ただし、時代によっては出題に偏りが見られたため、特定の時代に出題が集中しないように引き続き配慮をお願いする。特に、次年度は原始・古代（旧石器・縄文等）、中世（南北朝）、近世（織豊）からの出題が増えることに期待したい。また出題形式について、正誤の組み合わせ問題の7題中4題が選択肢①X 正 Y 正の組み合わせであり、年代配列問題の4題中3題が選択肢⑤Ⅲ－Ⅱ－Ⅰであった。そのため、特定の選択肢に偏っていた印象が否めない。次年度以降、選択肢の分散にも留意されるようお願いする。

なお、毎年のように述べていることではあるが、「日本史A」「日本史B」の科目としての性格の違いを考えれば、共通問題の出題はできるだけ避けていただきたく、引き続き検討をお願いする。

第3 問題作成部会の見解

日本史 A

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「学習指導要領」2(3)ウ「近現代の歴史にかかわる身の回りの社会的事象と関連させた適切な主題」として、「家族の歴史の自主的探究」をテーマに掲げた。自身を出発点に数世代をさかのぼることで、近現代日本史全般を見渡し、学習指導要領2(1)にいう「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものである」ことを意識させることを目標とし、明治以降の家族の家系図という身近なものから歴史を考察させることを意図した問題。

問1 戦時期における男女の身なりに対する統制について、基本的な知識を問うた。「知識ではなく会話文という問題の資料から正答を導くという点で良問」とであると評価された。

問2 兵役と選挙権という国民（成人男女）の義務と権利に関わる基本的な知識と結び付けて理解できるかを問うた。「家系図の人物の生きた時代と照らし合わせて考察させる問題という点では良問」とであると評価された。

問3 図から読み取った情報と、戦前・戦後の民法における婚姻に関する規定に関する基本的な知識と結び付けて理解できるかを問うた。正解率はやや低かった。

問4 メモで与えられた知識を用いて、人口動態に関わるグラフを読み取る技能を問うた。「メモをもとにしたグラフの読み取りで複数の資料を活用し判断する、共通テストらしい良問である」と評価された。

問5 図の情報と戦前・戦後の学校制度に関する基本的な知識と結び付けて理解できるかを問うた。正解率はやや高かった。

問6 新聞記事などの史料の読解力を前提に、軍事についての基本的な知識を問うた。「資料活用問題としては共通テストらしい問題である」と評価された。

問7 戦時期の政治・軍事・国際情勢についての時系列的な理解を史料読解を前提に問うた。正解率はやや低かった。

第2問 「学習指導要領」日本史A「2内容(2)近代の日本と世界 ア近代国家の形成と国際関係の推移」に示された「明治政府による諸改革に伴う社会や文化の変容」に着目して、「開国から明治維新を経て近代国家が形成される過程について考察させる。」にのっとり、当該期の政治・社会に関する基本事項、および資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりについて類推する力を問うことを狙いとした。なお、本問は「日本史B」第5問との共通問題である。

問1 自由民権運動と社会主義に関する知識・理解を問う空欄補充問題である。思考力・判断

力とともに知識・理解の質を問うことに成功しているという評価を受けた。標準的な正答率であった。

問2 幕末維新期における武士の動向に関する知識・理解を問う問題である。単なる用語の暗記ではなく、知識・理解の質も問う問題という評価の一方、基本的な人物・事項の組合せという評価もあり、正答率は高めであった。

問3 明治期の学校・教育のあり方について、資料を通してその基本的な知識・理解を問う問題である。史料の内容は丁寧に読み進めれば判断可能という評価を得たが、正答率は低めであった。今後、史料内容と時代背景との因果関係に留意して作問したい。

問4 明治期に女性が置かれた地位と、その時代背景との知識・理解を問う正誤判定問題である。女性をめぐる時代状況についての知識・理解の質を問う良問という評価を得た。正答率は低かった。

第3問 「学習指導要領」2(2)「開国前後から第二次世界大戦終結までの政治や経済、国際環境、国民生活や文化の動向について、相互の関連を重視して考察させる」に基づき、海外留学を希望するある生徒が身近な関心から歴史に関する問いを深めるという学びの場を設定し、関連する近現代日本史の基本的事項を問い、考えさせることを狙いとした。海外経験を糧とした人物の活躍に引きつけた3つのリード文を通じて、政党政治や外交、社会状況に関する理解を問うた。

問1 明治政府の基本方針と憲法制定に際して参考にした国について問うた。正答率は高かった。

問2 海外経験を有する人物の事績や政策について問うた。標準的な正答率であった。

問3 日清戦争から第一次世界大戦までの時期の経済と政治について基本的知識を問うた。「年代のような些末な知識ではなく時期や時代背景で判別できる良問」と評価された。

問4 パリ講和会議の成果と日本の関わりについて、基本的知識と資料読解の技能、事象を対比する思考との組合せを求めた。「正確な知識・理解を踏まえた上で資料を読み取らせる良問」と評価された。

問5 第一次世界大戦後の基本的事実と文化について問うた。標準的な正答率であった。

問6 両大戦間期の議会について、資料から読み取った情報や習得した基本的知識を活用する形で問うた。標準的な正答率であった。

問7 世界恐慌に関する基本的知識を、日本と世界の歴史の展開や相互の関連性を踏まえて総合的に理解しているかを問うた。「歴史的思考力を問う意味でも良問」と評価された。

第4問 学習指導要領2(2)「開国前後から第二次世界大戦終結までの政治や経済（中略）の動向について、相互の関連を重視して考察させる」及び、学習指導要領2(3)「第二次世界大戦後の政治や経済（中略）の動向について、現代の諸課題と近現代の歴史との関連を重視して考察させる」を踏まえ、第二次世界大戦後の民主化政策をテーマとして、改革が実施された戦後のみならず、戦前・戦時期からの流れを理解し、歴史的な事象（農地改革）の背景・原因・結果・影響を生徒がスライドにまとめて考察する学習とした。これを通して関連する近現代日本史の基本的事項を問うことを狙いとした。なお、本問は「日本史B」第6問との共通問題である。

問1 明治期の地主と小作人の状況に関する基本的な理解を問うた。高校の先生より良問と評価されているが、土地制度と社会運動については「多くの受験者が苦手とする」との指摘もあり、正答率はやや低かった。

問2 1920年代に設立された社会運動の団体に関する基本的な知識を問うた。基本的な語句の選択問題であり、標準的な正答率であった。

- 問3 戦前期の寄生地主制の形成と動揺に関する資料(スライド)から読み取った情報と近代史の知識を活用して考察する力を問うもので、高校の先生より「良問」と評価された。
- 問4 アジア太平洋戦争下の物資の統制に関する基本的な知識を問い、戦時体制下の社会についての正確な理解を求めている。正答率はやや低かった。
- 問5 戦時期の寄生地主制と農業統制との関係に関する資料(スライド)から読み取った情報と近代史の知識を活用して考察する力を問うた。正答率はやや高かった。
- 問6 農地改革の過程と実績に関する資料(スライド)から読み取った情報と現代史の知識を活用して考察する力を問うた。標準的な正答率であった。
- 問7 農業基本法と減反政策という戦後の農業に政策の目的についての基本的な理解を問うた。正答率はやや低かったが、高校の先生より「良問」との評価を受けた。
- 第5問 学習指導要領2(1)「現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から(中略)歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせる。」に基づき、生活保護を含む社会保障に関するテーマを取り上げ、学習指導要領3(1)ウに基づき年表・史料の読解を通して、近現代日本史の基本的事項と分析的・関連的思考力を問うた。明治期から戦後まで横断する年表を用いることで時代を通観する意識付けがされており、年表・会話文や諸資料などを丁寧に読み込み、情報を読み取る技能が問われる問題と評価された。
- 問1 戦前の省庁と、対外戦争に関する基礎的な知識を問うた。会話文を読み込む作業と年号判断が必要であり、会話文をしっかりと読み込むことが求められる問題と評価された。正答率はやや低かった。
- 問2 工場法の成立背景に着目して、歴史の諸事象相互の関連を明らかにする力を問うた。明治末制定の工場法の時代的背景や、大正期段階での労働運動の広がりとの差違について正確な知識・理解が求められる問題と評価された。正答率はやや低かった。
- 問3 選択肢の資料(要旨)を読み取った情報と、恤救規則との関わりを類推する力を問うた。丁寧に資料を読み込み、思考力・判断力をはたらかせることが求められる良問と高い評価が得られた。標準的な正答率であった。
- 問4 1920年代の生活文化に関する知識を、歴史的事象を時系列的にとらえる力とあわせて問うた。基本的な知識・理解を問う問題であり、取り組みやすい問題とも評価された。標準的な正答率であった。
- 問5 史料を読解する技能とともに、読み取った情報から総力戦に関するリード文の説明との関わりを類推する力を問うた。資料と選択肢をそれぞれ丁寧に読み込み思考力・判断力をはたらかせることが求められる良問と評価された。正答率は高かった。
- 問6 戦時下と戦後における思想・文化に関する知識を、時代背景に着目して相互の関連を明らかにする力とともに問うた。学習指導要領・教科書の範囲内の問題となっているが、選択肢についてはやや細かい、あるいは別の選択肢でもよかったのではないかとの意見もあった。今後いっそう留意したい。
- 問7 戦後から現代にかけての男女平等をめぐる事象を時系列的にとらえる力を問うた。難度が高いと評価された。正答率はやや低かった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

今年度の共通テスト「日本史A」の平均点は49.57点で、昨年より上昇したが、ほぼ標準的な問題を作成できたと判断している。

大問の設定として学習場面を多く用いたことで、今後学校現場でも史資料を読解する活動や歴史

事象の解釈に関する活動が求められるとの指摘もあった。教育研究団体からは、用語の詳細な知識が求められたこと、二者択一の組合せを問う問題が多かったことが指摘されたものの、多種多様な資料活用して思考・判断させる構成になっており、学習到達度を測るのに適切な難易度であったと評価された。来年度はこれらの指摘を踏まえ、知識を活用しながら思考力を問う良問となるよう留意したい。

4 ま と め

今年度の「日本史A」の平均点は49.57点で、昨年より上昇したが、ほぼ標準的な問題を作成できたと判断している。来年度以降も、解答しやすい方向で作題を進める。

本部会は従来からの作問上の留意点として以下の4点を挙げてきた。

- ・ 高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく、標準的な問題を作成するように心掛ける。
- ・ 高校現場での授業に配慮する。
- ・ 問題領域や設問形式のバランスや文字資料・図版資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ、「歴史的思考力」を問う問題をより多く出題するような工夫する。
- ・ 「日本史B」との共通問題について、難易度に一層配慮する。

来年度も、センター試験や今年での共通テストでの知見の蓄積を活用し、また今回ご指摘いただいたことも踏まえ、問題作成を行っていききたい。

日本史B

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する。用語などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず、歴史的事象の意味や意義、特色や相互の関連等について、総合的に考察する力を求める。問題の作成に当たっては、事象に関する深い理解に基づいて、例えば、教科書等で扱われていない初見の資料であっても、そこから得られる情報と授業で学んだ知識を関連付ける問題、仮説を立て、資料に基づいて根拠を示したり、検証したりする問題や、歴史の展開を考察したり、時代や地域を超えて特定のテーマについて考察したりする問題などを含めて検討する。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 「学習指導要領」1の「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させ」るべく、身近な生活文化に関わる「貨幣」をテーマに高校生が博物館に赴いて学習するという場面を設定した。博物館での学習は「学習指導要領」3(1)ウの「博物館や資料館の調査・見学などを取り入れるよう工夫する」による。「学習指導要領」2(6)ウの「歴史の論述」にあるように「主題を設定させ、資料を活用して探究」する過程を重視した設問とした。以上の意図のもと、幅広い時代にまたがる設問とし、史料や図を豊富に用いて、出題形式もバラエティに富むよう心掛けた。実際、「古代から近現代までを俯瞰する内容となつて」おり、「図版やグラフ、インターネット上の資料を用いた多様な問いがみられた」と評価された。

問1 「古代の銭貨铸造」という歴史的事象と、史料から読み取った情報との結びつきを類推できるかどうかを問う問題。教科書知識がなくても、資料の情報を基に解答を判断できる工夫された良問と評価された。

問2 「中世の銭貨流通」についての、基礎的な知識を問い、あわせて『一遍上人絵伝』という絵画資料を読み解く技能を問う問題。問題文Aに示される高校生のメモや会話の内容と関連付けて正答を判断する総合的な考察力が求められた」問題と評価された。

問3 「中世の流通・経済」についての基礎的な知識を問う問題。室町時代の権力構造や需要が増大する社会の様子について正式な理解が求められる問題と評価された。

問4 「近世の貨幣改铸」について、図から読み取れる情報と、習得した知識を活用して、歴史的事象の推移や変化を考察する力を問う問題。グラフに示されるデータの項目を正確に理解した上で数値の変化を把握する技能と分析力が求められた問題と評価された。

問5 「近代の貨幣制度」について、日本と世界の歴史の展開や相互の関連を踏まえ、歴史的事象を時系列的にとらえることができるかどうかを問う問題。銀本位制・金本位制の成立過程を押さえた良問と評価された。

問6 問1から問5、及び世界の歴史の展開を踏まえ、「貨幣の歴史」について学んだ内容をまとめることができるかどうかを問い、さらに現代の課題を考察するため、「貨幣」の歴史的意味を総合的にとらえることができるかどうかを問う問題。用語の理解とともに、問題文・資料・選択肢の全てを丁寧に読み解く読解力や複数のソースから得た情報を統合させる考察力が問われる問題と評価された。

第2問 「学習指導要領」第4節日本史Bの2内容(1)「原始・古代の日本と東アジア」の規定を踏まえて問題作成した。資料に基づいた歴史の叙述や考察についての理解をはかる目的で、古

代における文字使用の歴史をテーマに選び、弥生時代から平安時代までの国際環境や政治・社会制度、古代国家形成過程、文化などについて問う問題を作成した。学校の授業での高校生の発表という場面設定は、学びの過程の実践として好意的に受け止められている。全体として、正答率は標準的であった。

問1 倭国が外交関係をもった中国王朝に関する基礎的な知識を踏まえ、それを時系列にとらえることができるかどうかを問うた。正答率は低かったが、発展的な年代配列問題であり、受験者には想定外の出題であったと思われるが、新科目『歴史総合』を意識しており、良問であると評価された。

問2 古代の政治・文化に関する知識を活用して、史料を読み解くことができるかどうかを問うた。史料の読解力と歴史的評価の正確な理解を求めた基本的な問題とされ、標準的な正答率であった。

問3 7世紀後半の木簡に関する二つの事例を合わせ考え、その意味するところについて、古代の政治・社会・文化に関する知識と関連付けることができるかどうかを問うた。事例から歴史的評価を選択する新しい設問形式が評価された。

問4 「国風文化」に関する二つの評価を導くに至った根拠について、日本史に関する基礎的な知識を活用しながら関連付けることができるかどうかを問うた。歴史的評価から根拠を選択する新しい形式が評価され、また知識の理解に基づいた考察力を問う良問であるという評価や、教科書の知識がなくても解答を判断できる工夫がされた良問であるという評価を得た。

問5 設問全体を通じて提示した諸資料や知見を合わせ考え、その意味するところについて、古代の政治・社会・文化に関する知識と関連づけることができるかどうかを問うた。読解力、考察力、表現力を問う問題であり、表現力を問うための適切な工夫が設問に凝らされていたと評価された。

第3問 「学習指導要領」日本史B「1目標」に示された「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察」を意識するなか、「2内容」の「(2)中世の日本と東アジア」に示された「歴史資料を含む諸資料を活用して、歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を考察する」及び「武士の土地支配と公武関係、宋・元などとの関係、仏教の動向に着目して、中世国家の形成過程や社会の仕組み、文化の特色とその成立の背景について考察させる」ののっとり、史料の読解に重きを置きつつ、おもに京都・奈良などの都市と地方との関係に注目しながら、各時代の政治・社会・文化などについて、理解を問うた。

問1(1) 中世における荘園の成立について史料を読み解いて理解する。荘園に関する史料を注等を頼りにしながら理解させる問題で、正答率は高かった。

問1(2) 荘園絵図を読み解いて、中世荘園の特質の理解を問うた。高い正答率で、視覚的な情報を活用する従来にない出題は、今後もこのような出題を期待するとの評価をえた。

問2 中世前期における都市と地方の関係について、政治・文化など多方面の理解を問うた。用語の正確な理解を問う標準的な正誤問題であったが、正答率はやや低かった。

問3 中世後期において頻発した一揆について、各々の特徴や社会の変化から理解しているかを問うた。正答率は標準的であった。

問4 流通や文化的な交流の動きから、中世後期の都鄙関係や地域間の関係についての用語と用語の関連性を含めた正確な理解を問うた。正答率はやや低かった。

第4問 「学習指導要領」2(3)「近世の国家と社会や文化の特色について、国際環境と関連付けて考察させる」ことをふまえ、「近世国家の形成過程とその特徴や社会の仕組み」をとらえながら、史料から読み取った情報や習得した知識を活用して、歴史的事象の推移や変化を考察する

ため、儀式・儀礼に関する設問を掲げ、近世日本の基本的事項を問うことを狙いとした。政治史、社会史、文化史に関する小問を中心に構成され、文献史料、絵図を用いた問いもみられる出題だと指摘された。

問1 江戸城本丸御殿の模式図を基に、近世の大名についての基礎知識を問う問題。空間認識を問う良問との評価を得た。受験者にとって馴染みのない資料との指摘もあったが、正答率はやや高かった。

問2 武家諸法度の内容とその変化について問う問題。文I「大船の建造禁止を解き」が安政の改革の一環であることが判断しにくいかもしれないという意見もあったが、標準的な正答率であった。

問3 地域間の接触や交流などの歴史的作用をとらえるため、近世の対外関係に関する歴史的事実を問う問題。基本的な正誤問題（正文選択）と評価され、正答率はやや高かった。

問4(1) 史料の読解を通じ近世の休日や生活・社会について問う問題。初見史料を丁寧に読み解く力が求められると評価されたが、正答率は高かった。

問4(2) 史料の読解を通じ幕末維新期の祝日について問う問題。史料の内容を問う基本的な正文の組合せ問題と評価され、正答率はかなり高かった。なお、問4(1)(2)については、2つの史料を比較して解かせる出題を期待したいとの意見が出されたので今後の課題としたい。

第5問 「学習指導要領」日本史B「2内容(4)近代日本の形成と世界 ア明治維新と立憲体制の成立」に示され当該期の政治・社会に関する基本事項、及び資料から読み取った情報と歴史的事象との関わりについて類推する力を問うことを狙いとした。なお、本問は「日本史A」第2問との共通問題である。

問1 自由民権運動と社会主義に関する知識・理解を問う空欄補充問題である。用語の内容の正確な理解が求められる問題という評価を受けた。正答率は標準的であった。

問2 幕末維新期における武士の動向に関する知識・理解を問う問題である。場所と人物の関連性に正確な理解が求められる問題という評価の一方、基本的な人物・事項の組合せ問題という評価もあり、正答率は高めであった。

問3 明治期の学校・教育のあり方について、資料を通してその基本的な知識・理解を問う問題である。史料を丁寧に読み解く力とともに、教育の歴史に関する正確な理解が求められる問題という評価を受けた。正答率は標準的であった。

問4 明治期に女性が置かれた地位と、その時代背景との知識・理解を問う正誤判定問題である。女性史を正面から取り上げた問題で、用語に関する包括的な理解が求められる問題という評価を受けた。正答率はやや低かった。

第6問 「学習指導要領」2(6)ウ「歴史の論述（中略）適切な主題を設定させ、資料を活用して探究し、考えを論述する活動を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」および学習指導要領3(1)イ「(前略)前後の時代を比較してその移り変わりを考察する学習…の充実」を踏まえ、第二次世界大戦後の民主化政策をテーマとして、改革が実施された戦後のみならず、戦前・戦時期からの流れを踏まえて、歴史的事象（農地改革）の背景・原因・結果・影響を、生徒がスライドにまとめて考察する学習とした。これを通して関連する近現代日本史の基本的事項を問うことを狙いとした。なお、本問は「日本史A」第4問との共通問題である。

問1 明治期の地主と小作人の状況に関する基本的な理解を問うた。土地制度と社会運動については「多くの受験者が苦手とする」との指摘もあり、正答率は低かった。

問2 1920年代に設立された社会運動の団体に関する基本的な知識を問うた。基本的な語句の選択問題であり、標準的な正答率であった。

問3 戦前期の寄生地主制の形成と動揺に関する資料（スライド）から読み取った情報と近代史の知識を活用して考察する力を問うた。正答率は高かった。

問4 アジア太平洋戦争下の物資の統制に関する基本的な知識を問い、戦時体制下の社会についての正確な理解を求めている。標準的な正答率であった。

問5 戦時期の寄生地主制と農業統制との関係に関する資料（スライド）から読み取った情報と近代史の知識を活用して考察する力を問うた。正答率は高かった。

問6 農地改革の過程と実績に関する資料（スライド）から読み取った情報と現代史の知識を活用して考察する力を問うた。正答率は高く、よくできていた。

問7 農業基本法と減反政策という戦後の農業に政策の目的についての基本的な理解を問うた。標準的な正答率であった。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

今年度の共通テストでは「日本史B」の平均点は64.26点で、前年度のセンター試験より1.19点上昇した。高校教員からは、リード文と小問との関わりがより密接になり、また史資料の読解が増加して受験者への負担は増えたが、小問数を減らしたため適正な分量になったとの評価を得た。教育研究団体からは、平均点が昨年より上まわったが、A・Bとの平均点の差が縮小したとの指摘を受けた。

出題内容については、高校教員からは、受験者にとって初見の史資料が複数あったが、脚注が丁寧に付され、正確な判断ができるように配慮されているとの評価があった。「高等学校における日本史学習に、基本的な知識理解とともに、歴史的事象の意味や意義、特徴、つながりの総合的な考察を明確に求めるもの」であり、「受験者の培ってきた力や理解を評価するのにふさわしい問題」との評価をいただいた。また、過渡期にあたる今年度の受験者が必要以上に混乱しないような配慮があること、博物館や学校の授業といった実際の学びの場が設定されており、高校における日本史学習に指針を示す工夫がされていることが評価された。

教育研究団体からは、「問題作成の随所において、学力の三要素である主体的に学習に取り組む態度を意識した内容が盛り込まれて」いたとの評価をいただいた。また例年より組合せを問う問題が目立ち、時代や分野に多少の偏りがあったものの、豊富な史資料を活用して、思考・判断につながる出題が多く、受験者・教員にとって「不易と流行の均衡のとれた出題であった」との評価をいただいた。

来年度以降も、これらの指摘を踏まえ、難易度のバランスに留意しながら、わかりやすい表現に努め良問を作るよう心がけたい。

4 ま と め

今年度の「日本史B」の平均点は64.26点で、標準的な問題を作成できたと判断している。来年度以降も、この方向で問題作成を進めたい。本部会は従来からの問題作成上の留意点として以下の4点を挙げてきた。

- ・ 高等学校教育の範囲と水準を逸脱することなく、標準的な問題を作成するように心掛ける。
- ・ 高校現場での授業に配慮する。
- ・ 問題領域や設問形式のバランスや文字資料・図版資料・地図・表・グラフの適切な使用に留意しつつ、「歴史的思考力」を問う問題をより多く出題するような工夫する。
- ・ 「日本史A」との共通問題について、難易度に一層配慮する。

センター試験や今年度の共通テストでの知見の蓄積を活用し、また今回ご指摘いただいたことも踏まえ、問題作成を行っていききたい。